

あ

ぎ

な

### 青森県立つくしが丘病院 第137号

## B病棟に勤務して

主任看護師 山内 健靖

B病棟の開設から一年半が過ぎました。思えば平成二十一年三月末に現在のB病棟が開設され、旧5病棟のスタッフを中心とし患者様も半数近くが移動しました。広い廊下、明るい病室、何もかもが新しく気が引き締まる感じだったのを覚えています。

B病棟は急性期の男女混合閉鎖病棟であり、思春期病棟もあります。戸惑いながらも患者様の早期の退院を願ってケアをしてきました。年間の入院患者数は二百名を超えます。時には一日五名の入院もありました。その分退院患者数も多くなります。急性期病棟として入院から退院までを三か月以内とし、その間に二週間目、一か月目、二か月目とそれぞれ医師、看護師、薬剤師、臨床心理士、作業療法士、精神保健福祉士等と治療方針や社会復帰の方向性、日常生活で何を必要があるかを話し合い、さらに患者様や家族とも話し合いながら退院へと進めてきました。試行錯誤もありましたが、現在は順調に話し合いが持たれています。B病棟では毎週火曜日の午後に作業療法士が中心になって心理教育プログラム「回復セミナー」を行っています。退院後の生活で役立ててもらい、症状の再発や悪化による再入院を防ぐことを目的に

して、6回をひとまわりとしています。内容は、

「病気の特徴と回復までの経過」

「薬の作用、副作用」

「入院生活・活動と睡眠について」

「再発予防とリハビリについて」

「食生活と健康について」

「退院後の生活を考える」

となっております。

参加した患者様の感想として

「内容がわかりやすい」

「退院後も役に立ちそうな内容だった」

「分からないこと、不安に思っていたことを聞いてよかった」

「他の人の話しを聞く事ができて、悩んでいるのは自分だけではないとわかった」

など好評のようです。最近では他の病棟からの参加者も見られます。これからは、現在のままで行うのか、開催の方法や内容を見直すのか課題は多く、スタッフで話し合い、より充実したものになりたいと思っています。

B病棟は患者様の入退院が多く、スタッフの業務は煩雑になりがちですが、ケアを通して話し合いながら患者様への理解を深め、今何が必要なのかを見極めて患者様の早期退院を目指して、スタッフ一同がんばっていきたいと思っています。



回復セミナーの様子

# 作業療法とは

作業療法室 主査 伊藤 誠一

作業療法(Occupational Therapy)とは身体

(脳血管疾患、整形外科疾患、循環器疾患、内分泌疾患など) または精神に障害のある方々に対して行われますが、最近では運動機能などの機能的な障害を持たないが将来それが予測される方、ガン終末期の方も対象となっています。このような方に対して手工芸やその他の作業を通して運動機能や精神心理面の改善、維持及び開発を促し、低下した生活の向上を目指すことをいいます。当院においては、手工芸やスポーツレクリエーションなどを通して生活リズムを保ち、ストレスの解消、対人交流の維持や改善を行っています。退院後の生活を支えるために料理の練習を行うなど家事動作の練習も行っています。

また心理教育を行い病気について理解を深めたり、さらに積極的なコミュニケーション技術の獲得を図れるようにSST(生活技能訓練)

を導入しています。傍から見ると遊んでいるように見えると思いますが、このようにいろいろな目的をもつて行っています。



「患者さんの作品」



「作業療法室内」

# 病気のミニ知識 ③7

## 『統合失調症のお話し』

部長 林本章

今日は統合失調症の症状について少しお話ししてみます。統合失調症に陽性症状(幻聴、被害妄想など)、陰性症状(意欲の低下など)があることはご存知の方が多いのではないのでしょうか?しかしそれらの症状が落ち着き、日常生活に戻ってから明らかになる症状として「認知機能障害」があります。統合失調症が病気であると同時に、精神の障害(後遺障害)と言われるのはそのためです。

認知機能障害は広範囲に渡って微妙に生じます。そのことでちょっとした物忘れや、集中力の低下、作業の能率が落ちる、臨機応変な行動がとれないなどの問題がおこる場合があります。また緊張しすぎて周囲に馴染めない、自分の気持ちを上手く伝えられないなど対人関係が円滑にできなくなる場合があります。その結果、病気になる前にできていた仕事が出来ていきな、というようなことが起こるのです。しかしこのこと

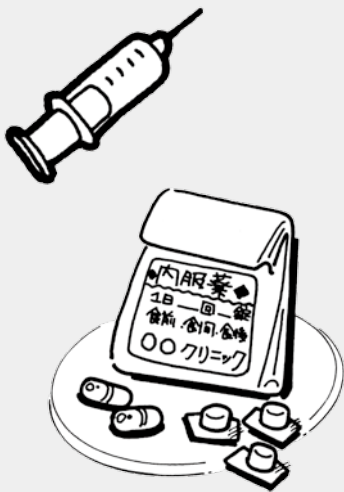


はわずかで目に見えない変化であるゆえに周囲の人から理解されにくく、本人一人でも悩み自信を失ってしまう原因になります。本人にとって大きな問題ですが、まずはこのことを理解する必要があります。認知機能障害は怠けなどではなく病気の症状です。しかし、完全にはなかなかいきませんが、時間をかければ改善されていく部分があります。病気によってダメージを受けた脳の神経が、少しずつ回復していくものと考えられます。特に少なめの量の新規抗精神病薬で長期間安定し、再発しない場合にその傾向がはっきりみられます。逆に再発を繰り返すと、認知機能が徐々に悪化することがあるので注意が必要です。

再発せず安定した生活を維持するためには、ストレスを避ける工夫や、新しい楽しみを見つけることも必要です。話し合える友人、デイケアや作業所などの出かけていける場所が支えになると思います。たった一

人でこの病気を克服していくのは困難で、病院や家族などと協力することがなによりも大事です。

さて、統合失調症は未だ不明な部分が多い病気です。しかし治療薬はこの10年で大きく進歩し、予後がかなり改善されてきています。多くの方が回復したり、軽度の障害を自覚しながらも社会復帰できるようになっています。病気の解明に向けた研究は今後スピードアップするとも言われています。治療法の将来には期待が持てそうです。



ちょっとひといき

「音が見える写真を求めて」

検査室 平野 秀則

私の写真歴はかれこれ四十年になるが、心に残る写真は二、三枚しかない。カメラを持った当初は写真は記録と考え、その時々々の風情・記念写真などを主に撮っていた。それではきれいな写真を撮りたいと思い、写真のテクニクやメカニズムを習得するため、女性モデルの撮影会や講習会によく参加したものであった。印象に残っているのは、東てるみが無名で十代の頃、幸畑のりんご園でのヌード撮影会である。当時の彼女はスタイルがよく美貌で、その翌年からいっきに一流モデルとなった。この頃カラーフィルムは高価なため、白黒の長尺フィルムを小分けして使用し、現像・焼付けは自分でやった。

写真とは、肉眼では確認できない世界を、すなわち写真でこそ見えてくる世界を描写したものとされている。よい写真の中には光と影が織りなす造形美を撮ったもの、力強い「生」を感じさせるもの、風のささやき、小川のせせらぎなど音が聞こえてくる様な写真があげられよう。松尾芭蕉の句に  
 〈閑<sup>しづか</sup>さや岩にしみ入る<sup>い</sup>る 蝉<sup>せみ</sup>の声〉がある。  
 蝉の声がミーンミーンと耳に残り余情、余韻を感じさせる。  
 これからは、「音が見える写真」を自分のモチーフとして写真を撮り続けたいと思っている。



「音が見える写真……」

つくし つめこみニュース

\*平成22年6月14日から変更になりました

区分	曜日	月	火	水	木	金
	新患	増谷	増谷 栗林	増谷 藤田	林本	増谷 坂本
再来	堀内	武田	岩佐 吉田	藤田	藤田	
	坂本	林本	栗林	増谷	堀内	
電話対応 (午前)	坂本	林本	栗林	増谷	藤田	

（平成二十二年六月十四日現在）  
**外来担当医表**